

(第十四章)

単なる事物の本性が欠如すると示す>事物が本性として有ることの理由を否定する>会合が本性として有ることを否定する>

[章の著述を説く]

言う。「諸事物は、自性が空性なのではないが、諸事物は自性が有るのみである。何故かといえば、会合が示された故である。ここで、世尊は、それやそれに、

『色形と識（知覚）と眼の三つが会合したことは触（接触）である。音声と、識と耳等も、その如くである。』

と説かれた。その如く、

『執着や、瞋恚や無知の結縛（煩惱の因）が、全く縛り付けた。』

と説かれた。

諸事物に自性が無ければ、会合したとは不合理であり、このように自性の無い諸事物が、如何様に会合したとなろうか。そう見れば、諸事物は自性が有るのみである。」

章の著述を説く>会合が本性として成立したことを否定する> [主張命題を挙げる]

説く。もし、諸事物がまさしく会合したことが合理であるならば、諸事物は自性が有るとなるものであるが、諸事物の会合そのものが不合理であるので、自性が有ると何処でなろうか。如何様に、といえば、

視られる対象と、視ると、視る者の、
それら三つの二つずつと、
一切も、互いに
会合したとなることは、有るのではない。 1

それら視られる対象と、視る（眼）と、視る者の三つは、二つずつと、一切も互いに会合したとはならない。視られる対象と視る（眼）も会合したとならないが、視られる対象と視る者も会合したとならず、視る（眼）と視る者も会合したとならず、視られる対象と視る（眼）と視る者も、会合したとならない。

その如く、貪欲と欲す者と、
欲すとなるものと、煩惱の
諸々の残りど、處の
残りも、三様相によって見たまえ。 2

斯くも、視られる対象と、視る（眼）と、視る者は二つずつと、互いに一緒に会合したとならぬが如く、貪欲と欲す者と、欲すとなるもの等も、二つずつと、一切も互いに一緒に会合したとならない。貪欲と欲す者も会合したとならず、貪欲と欲すとなるものも会合したとならず、欲す者と欲すとなるものも会合したとならず、貪欲と欲す者と欲すとなるものも会合したとはならない。その如く、残りの煩惱である瞋恚等や、處の残りである音声と耳と聴く者等も、二つずつと、一切も互いに一緒に会合したとはならない。

会合が本性として成立したことを否定する>理由を示す>他が本性として無いことによって、会合を否定する>

[論式を挙げる]

言う。「何故、それらの視られる対象等は、互いに一緒に会合したとならないのか。」

説く。

他が、他と会合したとなれば、
何故ならば、視られる対象等として、
その他は有るのではない。
それ故に、会合したとはならない。 3

ここで、もし「会合」という何かが有るとなれば、それは必ず他と他と一緒にあることよりそうなるのか？と問えば、何故ならば、視られる対象等において、その「他」が有るとは正理ではなく、それらに「互いにまさしく他であること」が有るのではない故に、互いに一緒に会合したとはならない。

他が本性として無いことによって、会合を否定する> [その方法を他にも当てはめる]

視られる対象等のみに、
他そのものが無いだけではない。
何であろうとも、何かと一緒にありながら、
まさしく他であるとは不合理である。 4

それら視られる対象等のみに、互いにまさしく他であることが不合理であるだけではない。このように、如何なる事物も、如何なる事物とも、一緒にまさしく他であることは不合理である。他そのものが無ければ、何ものも、何かとも一緒に会合したことは不合理である。

他が本性として無いことによって、会合を否定する>理由を成立させる> [理由を挙げる]

言う。「諸事物の他性を現前に認めながら『無い。』と誰が言って良いものか。」

説く。君が、諸事物の他性を現前に認めるただそれだけの為に、吾輩は君が諸事物の他性を認識していないと、良く理解する。このように、諸事物の他性が無いことは、天眼によっても認めることができなければ、君のような肉眼によつては、何を言う必要があるだろうか。何故かといえは、

他は、他に依拠して他である。
他無くして、他より他にはならない。

「他」というものは、それより他の何かに依拠して他となるのではないけれど、他が無ければ、他は自らより他とはならない。他であるものは、他に相互関係して「他」というが、自らより他とはならないので、「それを現前に認める。」と誰が言って良いものか。

言う。「そう見ても、他性が無いとはならない。他性は良く成立するだろう。」

説く。賢くない者にとってはそうなるだろうが、賢者にとってはならず、

何かに依拠して、何かである。
それは、それより他であるとは不合理である。 5

このように、何かに依拠して何かが起こるものは、「それより他である。」とその言葉を言うことは正しくないのではないか？

理由を成立させる>それに対する論難を斥ける> [不定因¹であるという論難を斥ける]

何故かといえは、

もし、他が、他より他であるならば、
他が無くとも適するとなるだろう。

¹ 不定因：似因（似る因=正しくない理由）の一つ。対論者にとって、その因（理由）であれば、主張命題の述語であるとは限らない理由。例えば「音声は、無常である。有である故に。」という論式では、「有」には恒常もあるので必ずしも「無常」ではない故に、不定因となる。

※正しい理由であっても、対論者が論題の要素をどのように把握しているかによって不定因になり得る。

もし、何かに依拠して他となるそれが、それより他であるとなれば、それが無くとも、それはまさしく他となるだろう。そのようであれば、粗織物に相對していないのみにおいて、壺は他性となるものであるが、粗織物に相對していない壺は他ともならない。そう見るので、粗織物より壺は他ではない。

言う。「それより他となっていないとしても、先ず、他は有る。」

説く。何？君は、まさしく駆逐する者の後を追うのか？君は、他性を排斥する理由が、他性を論立すると思っている。もし、「何かに依拠して他である」というそれより、それが他でなければ、ならばそれは自らの我性のみより他となると思うのか？

他より他である他であり、
無ければ無いので、それ故に無い。 6

何故ならば、他である何かより他である、その他が無ければ、他は無いので、自ら自身より他とはならない故に、他は無いのみであると知りたまえ。

それに対する論難を斥ける> [不成因²であるという論難を斥ける]

言う。「『他とは、他に依拠して他となる。』というただそれだけの故に、他は有るのではないのか。仮に依拠したとしても、他ともならなければ、『他である。』とは何を言うのか。」

説く。縁起生とはこのような我性であり、何故ならば先ず、他に依拠して「他」という故に、世間の名称に従って「他である。」と言う。

何故ならば、清浄を見るがままに考察したならば、

他性は、他に有るのではない。
他でないものにも、有るのではない。

² 不成因：^{かじょういん} 以因の一つ。対論者にとって、その因（理由）が主張命題の主語ではない理由。例えば「音声は、無常である。色形である故に。」という論式では、「色形」は「音声」に当てはまらない故に、不成因となる。
※正しい理由であっても、対論者が論題の要素をどのように把握しているかによって不成因になり得る。

何故ならば、「粗織物に相對して壺は他」ということは、粗織物に相對した故と、粗織物に頼る故と、自らより良く成立していない故に、壺に他性は有るのではない。何故ならば、「粗織物に相對しない、他ではない壺」という單一においても、「他ではない」と合致しない他性は無い故に、「勝義に準じて他は無い。」という。

それ故に、世尊も水木の集積を示し、「水木の集積とは、内側が空っぽで真髓を悟るとならない故に、何も無い。」とも示された。

言う。「もしそのように、壺が他ではないならば、そう見れば壺そのものが他ではなくなり、他無くして他でないものも無いので、他も有ることになる。」

説く。対治（対称物）よりも、他性は不合理である。何故かといえば、他ではないと不合理である故であり、このように「他」に相對して「他でない」となるけれど、その他性も、考察したならば不合理である。

他性が有るのでなければ、
他か、そのもの（自性）は有るのではない。 7

今その他性が有るのではなければ、その対治である「他ではない」それ自体も無い。しかし「他ではないものが無ければ、その対治である他は無い。」という言葉が示されるとならないか？

他にも言う。「他に相對して他となるのではないが、『他性』とは総体であり、それを具えるので他となる。」

説く。もし、他性を具えるので他となれば、自らより良く成立していない故に、他に相對したのみによって、他となるのではないか？

言う。「他性は、他に確実に留まるのみであるので、それにも何の相對が必要か。」

説く。

「他性は、他に有るのではない。」

「他性とは、他より確実に留まるのみであるので」と言った、それは正理ではなく、他性とは他に無い。何故かといえば、斯くも、

「他でないものにも、有るのではない。」

ここで、壺とは自らの我性より他ではないので、そこに非他性と合致しない他性は有るのではない。

もしその他性が、他にまさしく確実に留まるとなれば、壺自体の我性よりも他そのものとなり、他でないとはならないけれど、壺自体の我性よりまさしく他になったものは主張しない。そのようであれば、何故ならば、他ではない壺には無い故に、他にも（他性は）有るのではない。もし有るとなれば、全ての場合において有るとなるだろう。

仮に、『壺が絨毯に相對したならば他である時、その壺にその他性が有る』と思えば。

そう見るならば、他性は確実に留まらないと示したのである。（何故ならば）その事物は相對して有る故である。

他性として設けたことと、探究して有る（見出だす）ことをも、命題として主張したことにもなるので、それも不合理である。（何故ならば）自派の宗論と矛盾する故である。

また他にも、二つの事物が有れば会合することになるが、無ければならないので、そこで、もし先ず、自性として他ではないものが他性を具えることによって、如何様に他となろうか。乳と混ざった水も乳とはならず、乳も水にはならぬが如くである。仮に壺が自性として他であるならば、他に他性を具えることを追求する、何が必要か。

そう見るので、「それは他性を具えるので、他となる。」や、「他性は他に確実に留まる。」ということは、凡々である。

言う。「他性が他に確実に留まろうと、留まらなかりと構わない。ある意味において他性であると主張するその『他』は、とりあえず有る。」

説く。何？君は世間を走り回ることを始めるのか？君は他性が無いので、他を論証しようと努めている。

「他性が有るのでなければ、他か、それ自体は有るのではない。」

「他性である他の事物が有るのでなければ、他か、それ自体は無い。」と示したのみではないのか？もし、他の事物が無くとも他となるならば、君に愚かという事物が無くとも、愚かとなるだろう。もしそれを主張しないならば、ならば他の事物無くして他とはならない。それ故に、そのように考察したならば一切の事物において、他性とは如何様にも不合理である。

他性が無ければ、視られる対象等や、貪欲等が、如何様に互いに一緒に会合したとなろうか。会合が無ければ、君の「会合」という理由より提起された事物の自性が、合理であると何処でなろうか。

理由を示す> [同一と別を分析して、会合を否定する]

もしまた、君の心意に思うことによって『他でもあるが、それ自体でもある。』と思えば、そう見るとしても会合はまさしく不合理である。何故かといえば、斯くも、

それは、それと会合したことは無い。
他と他も、会合したとならない。

そこで先ず、それ自体が、それと会合したことは不合理である。何故かといえば、それのみに尽きる故と、一緒の意味として不合理である故である。もし、そう見ても（会合したと）なるならば、何も会合しないとならないので、それも主張しない。そう見るので、それ自体と会合したとは不合理である。

そこで、何かにおいて「これは他である。」「これも他である。」というその存在においても、会合したとは不合理である。何故かといえば、まさしく他であるのみの故である。もし、まさしく他でありながらも会合したならば、そう見れば何も会合しないとならないので、それも不合理である。そう見るので、他性であるとしても会合したとは不合理である。

言う。「他となった二つが一つとなることは、例えば乳と水の二つが会合した（混ざった）如く、他と他も会合したとなる。」

説く。それにも、まさしくそれが留まる。先ず、乳と水が別となれば、その時には会合は無い。何故かといえば、まさしく別となった故である。まさしく同一となったその時にも、会合は無い。何故かといえば、まさしく同一である故である。

言う。「ある時に、まさしく同一となったことが会合である。」

説く。「もし、まさしく同一であろうとも会合したとなるならば、何も会合しないとはならないだろう。」と説いていないか？そう見るので、それも善くはない。

章の著述を説く > [それによって、会合しつある等も否定したと示された]

言う。「他となった複数物が会合しつあることが、会合である。」

説く。それにも、まさしくそれが留まりつあるのであり、もし「会合しつある」という複数の事物が一つ有るとなれば、それにおいても「これは他である。」「これも他である。」という他である故に、会合したとは不合理である。

仮に、「会合しつある」というそれが、まさしく同一であると述べられるのであれば、「会合しつある」という言葉は不合理である。まさしく同一のものが、如何様に会合しようか。

言う。「『半分会合した複数の事物が会合しつある』というそれらに、会合は有る。」

説く。そこにもまさしくそれが有る。もし先ず、それらが半分会合したならば、一方が会合したことによって「一切の我性が会合した。」と考察されたならば、まさしく同一である故に、会合したとは不合理である。

仮に、一方が会合しようとも我性はまさしく別であるとなるならば、別である故に、会合すると何処でなろうか。

もし、それら僅かな一部が会合し、僅かな一部が会合していないのであれば、我性が二つとなる。それらの会合である部分については、まさしく同一でない故に会合は無い。それらの会合していない部分についても、他である会合は無い。

言う。「『会合しつある』は無くとも良い。先ず、会合であることは有る。会合したことが有れば会合が有るので、会合も良く成立した。」

説く。嗚呼！何と大それた希望か！何かに「会合しつある」も不合理であり、会合し始めることも不合理であるにおいて、会合が合理であるとなるものか。「同一となるだろう。」と言った時、同一であるならば会合すると何処でなろうか。仮に会合しても単一でない（と主張する）ならば、そう見るとしても他ではない故に、まさしく会合していないのではない。

言う。「会合が無くとも良い。先ず、同一性の以前に他となる事物であるものが有り、それは会合する者であり、とりあえず有る。」

説く。何？君は両性具有者に嫉妬するのか？君は、会合無くして会合する者

がまさしく有ると主張しているだけだ。ここで、会合を為すものによって、会合の因より起こったものが会合する者であるが、その会合も、一切の様相において不合理である。それが無ければ、会合を為すものは無く、会合する者が有ると如何様になろうか。

それ故に、そのように正理を先行して、清浄を見るがままに考察したならば、

会合しつつあると、会合と、
会合する者も有るのではない。 8

それらが無ければ、君の「会合」を示した理由より提示された、事物の自性が成立すると、何処でなろうか。

会合が本性として有ることを否定する > [章の名を示す]

「会合を考察する」という第十四章である。